
どうだっていいけど。～夜兎の場合～

河野夜兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうだっていいけど。 ～夜兎の場合～

【Nコード】

N3855J

【作者名】

河野夜兎

【あらすじ】

ルーチカ先生にタイトルをお借りしました。
中身はどうでもいい話。

親の愛情なんて馬鹿げてる。

んなもんは、普通に両親がいて普通に家庭があり、平凡で退屈な毎日だとほざく奴らにだけ与えられた『特権』だと私は小さい頃から思っていた。

『普通の人』と違うと言う『負』の特別扱い。

親に棄てられた残念な人間。それが私に与えられた^{あしかせ}足枷
有難迷惑極まりない慈悲の言葉を浴び、その反面親がない事で
散々言われたくない言葉も浴びてきた。

当然の如く、私の考えは歪んで腐って堕ちていった。

《人間なんてクソだ。何かを考える事なんてもっとクソだ》と。

でも、そんな私にも大切な事である《生きてく強さ》を教えてくれた人がいる。

私と同じ境遇に育った人。

血の繋がりなんて全くないけど、私はその人を大切な兄だと今でも思っている。

彼は今人の親として、愛する家族に支えられて、自らも支えて平穏に暮らしている。

しかし、自分の親とはやっぱり和解できずに今日^{こんにち}に至っている。

奥さんは彼と母親の和解をと話を持ち掛けた事がある。しかし、「子供達には悪いけど、俺の親はもうこの世いないものだと思ってる」

彼はそう笑ったと奥さんは私に淋しげに語った。

そして、

「親を思い出すと、自分に自信が無くなるから嫌だ」と悲しげに笑うとため息をついた。

我が子を虐待する人間の血が自分の体の中に流れている事が怖い。もしかしたら、俺もいつか、母親が俺にしたような事を我が子にしてしまうんじゃないか…と。

その気持ち、痛いくらいわかる。

私もいまだ親とは仲が悪い。

今は母親だけになったけど、私は相変わらずくすっぱ母親に顔を見せないし、口も殆ど聞かない。

父親が死んだ時もそうだった。

今年の5月の終わりの話。

真夜中に家の固定電話が鳴った。

その頃私は不眠症が酷くて、その時も普通に起きていた。

電話の主は姉。

内容は、

「お父さんが危篤だから、〇〇病院へすぐ来て！」との事。

私は突然の事態なのにも関わらずまるでノーリアクション。全くもって感情がついていけない常態だった。

動揺もなく、悲しみもなく、ただ事務的に行かなくちゃと思い車を病院へと走らせた。

まるで知らない他人の危篤を知らされて挨拶程度に見舞いに顔を出すかのような感覚で、病院へつき夜間出入口で待ってた姉の元へと歩いた。

姉は震えていた。

いつもは気丈な元ヤンキーが俯き口元に手をあてがい、「どうしたらいいかわかんない…」と譚言みたいにつぶやいた。

不謹慎にも私は動揺した姉を見て、馬鹿じゃないか？とすら思った。

私達が今まで普通にしなくてもいいような辛い思いをしてきたのは誰のせいだ？

そんな諸悪の根源に対して、何で泣く、悲しむって感情が生まれるのか？私には理解できなかった。

お互い黙りこんだまま、エレベーターに乗り父親の病室へ。薄暗くて静まり返る真夜中の病院の廊下。

心拍数を計る機械の音と、警告音のような音に混じり響くうめき声は、父親の病室から発せられていた。

姉はその苦しむうめき声を聞き俯き肩を震えさせて歩く足を止める。

そんな姉を見てますます顔をしかめたくなっただけど、そんな事したらきつと姉は壊れちゃうんじゃないかと思うくらい弱々しい感じがしたから、黙って姉の背中を支えて歩くようにうながした。

病室に近づくにつれ、酷く響くうめき声。

大分苦しいみたいだった。無理もない。

医師に説明を聞くと、父の体は肺機能が極度に低下していて、3分の1にも満たない程しか酸素が取り込めないらしい。

その肺に炎症が起きている常態。

てか、なんでそんな常態になるまで一番近くにいた人間が気付かないんだ？ 全くもって意味がわからなかった。

心拍数のグラフが乱れて、警告音がやたらうるさく鳴る部屋。

「お父さーん、お父さーん……」

啜り泣く母親の声を聞いたら、どんどん冷ややかになる感情。

姉は母親の元へ歩く。

母親と揃いひたすら泣くだけ。

酷く頭が痛んだ。

頭ん中矛盾だらけで。

大体父親がこうなるまで放置したのは誰だよ？

父の体は骨と皮だけと言っても過言ではない程痩せ細り、本当に知らない他人みたいだった。

人間が一日二日でこんな常態になるワケないじゃん。

きつとずっと前から体は悪かったと思う。

思わず口をついて出た言葉。

「何でこんなになるまで病院連れていかんかったの？」

多分、すごい冷たいものいいだったと思う。

でも返ってきた言葉はさらに私をア然とさせた。

「だって、私病院怖いもんだから……」

全く意味がわからん母親の言葉。

この人頭がちよっとおかしいんじゃないか? と思った。

だってさ、普通自分が大事な人の様子がおかしいなら、救急車呼んででも病院へ連れていくでしょ?

なのに、自分が病院怖いからって何もせずに放置ってどうゆう事???

それなのに、すっかりしてとか泣いてやがる。

吐き気がした。

こんなのから自分が生まれてきたのかと考えたら、めまいもした。

違う意味で茫然自失。

今日の前で消えようとしてる命に対して生まれた別の気の毒さ。

あんたの人生って一体何だったの? って…。

病室の入り口で私は壁にもたれて父親の苦しむ様子を見ながら、ため息が出た。

きっと驚く程無関心で無表情だっただろう。

妹が駆け付けて父親に縋り付き泣く。

なんかまるでテレビドラマのワンシーンをぼけーっと観てる感じ。

同じ空間にいるのに、そこには温度の壁があった。

「なんか声かけてやってよお……」

妹は私を見て涙ながらにつぶやいた。

何をどう声をかけろと？

笑いたくなるのを堪えて父親に歩み寄る。

その時、散々呻いてた声を、苦しみ悶える体の動きをぴたりと止めて、私をじっと見つめて

「大丈夫だから泣くな」 ってはつきりと言って父は笑った。

正直びっくりした。

別にね、私泣いてなかったんだよ。なのにさ、なんでそんな事言っただんだ？ しかも私にだけって……………。

私は、

「泣いとらんで心配せんでいいよ。」

とだけ返したけど、多分その声は父には届いてないだろう。

再度苦しみ呻き、悶える…の繰り返し。

それから朝が来て、昼になり、日が暮れた頃に父親の呼吸数、心拍数はゼロになった。

そこからが大変だった。

葬儀屋に電話して、葬儀の準備。

元より親戚なんて知らないから母親に尋ねても、知らない。

だから、見送りは母親と姉の旦那と子供、妹の旦那と子供のみで、みんな悲しいから葬儀屋と打ち合わせもできないらしいから全て私が進めた。

喪主であるはずの母親は「私はなんも知らん」と葬儀の進行を放棄。

まあそうなる事はわかってたから、無視して進めた。

式場を借りて、死亡届けやら何やら役所回りをして、最低限のシンプルな葬儀。

お通夜は来訪者もなく、静かなもんだった。

棺から離れる事なく泣き続ける母親。

でもご飯はしっかり食べてた。

一緒に死ぬ気はないらしい。

つか、バタバタ忙しくてろくすっぽ寝てないし、疲れてご飯も喉通らないし、逆にこっちが倒れそうだったし。

葬儀を終え、火葬場に向かう時は疲れがピークで、足がふらついた。

棺が焼かれる場所はとてもせわしなくて、最後の別れて雰囲気もなく、流れ作業的に棺が焼き場に収められ遺骨になるのを別室で待つ。

作業が終了すると、アナウンスが流れ、遺骨の元へ。

そこにあったのは、白い残骸。骨っていうより、ボロボロの石灰質の塊。あれだけ痩せ細ってた父親は骨まで痩せてたみたいだった。

死ぬって、ほんと呆気ない。
その一部を骨壺に収めてお経をあげて納骨して終了。

全てを終えて帰路についたひとり運転する車の中で、何故だか突然涙が零れた。

驚いた…。

何でだ？って思った。

今でも何でだろうと思ってる。

悲しいとか思っていないただ疲れたとしか思っていないのに、何で涙が出たんだろう…。

でもそんな事に対していちいち理由なんていらない気がしたから。

父親との思い出は殆どない。嫌な思い出はあるけど、もう忘れる。

だって、もう恨んでも仕方ないから。

母親は知らない。

生きてるうちに和解は多分無理だろうと思っている。

自分がお腹痛めて産んだ子供を棄てる生き物の気持ちなんて全然理解できん。

自分の子供には愛情を注がずに自分の旦那にだけ愛情を注いだ女の気持ちなんて、全然理解できん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3855j/>

どうだっていいけど。～夜兎の場合～

2011年1月27日02時59分発行